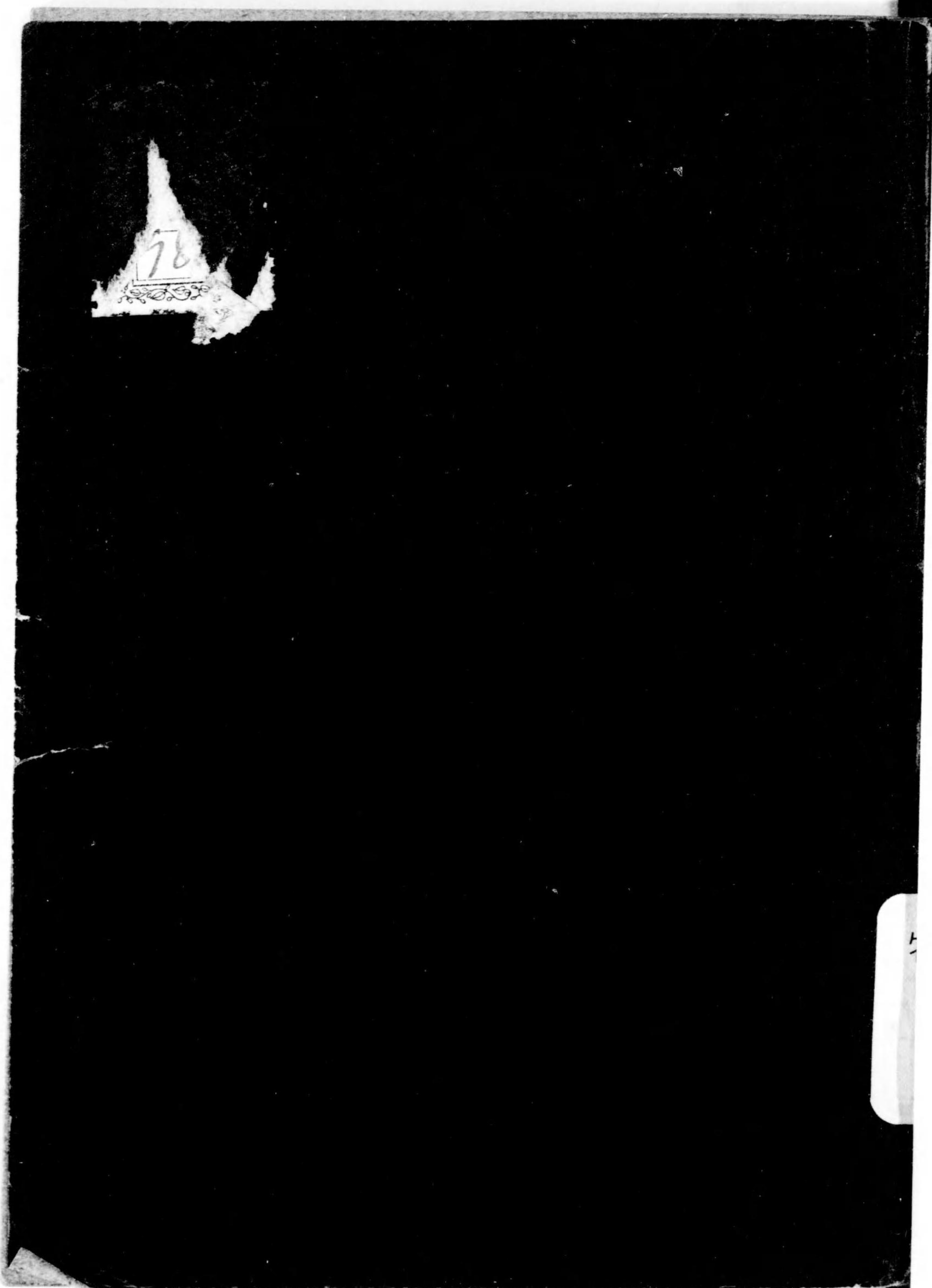


始



特10
519

はしかき

巻くときはは則ち退て密に藏れ、放つときは則ち餘
情陸離として盡さざるものは氣なり。氣は三才の
元なり。一氣百物を生じ、一元多情を蘊む。多情仍
韻を成すもの百餘章。其の七五調五十餘章を
て篇を成し、名けて一元多情と謂ふ。梓して
願つ。敢て文壇の珍たるを期せざるも、亦世
たるを疑はず。若夫殘稿は新收を併せて追梓に附
せん

大正三年七月
交
好
の
補
3
内

大正三年七月

一元多情序文

著者

一

目次

一	神	一
二	人	一
三	眼	二
四	耳	二
五	口	三
六	鼻	四
七	淚	四
八	臀	五
九	日本人	五

一元多情目次

一〇 罪の人……………六
 一一 兩舌……………六
 一二 案山子……………七
 一三 鳴子……………七
 一四 霞……………八
 一五 花……………九
 一六 鳳仙花……………九
 一七 卵の花……………一〇
 一八 茨の花……………一〇
 一九 女郎花……………一一
 二〇 をことへし……………一一

二一 姫百合……………一二
 二二 子子……………一二
 二三 水馬……………一三
 二四 曉の蝶……………一四
 二五 雨宿り……………一四
 二六 夕立……………一五
 二七 自修……………一五
 二八 試験……………一六
 二九 歸省……………一六
 三〇 野球……………一八
 三一 庭球……………二二

三二 ポートレース……………二四

三三 撃劔……………二六

三四 學ぶ我……………二九

三五 春の曙……………三一

三六 夏の日盛り……………三三

三七 秋の夕暮……………三四

三八 冬の夜寒……………三五

三九 田園の趣味……………三六

四〇 其の一 春の畑……………三六

四一 其の二 田植……………三七

四二 其の三 麥刈……………三七

四三 其の四 麥打……………三六

四四 其の五 田まわり……………三九

四五 其の六 草とり……………四〇

四六 其の七 晝休み……………四〇

四七 其の八 稻刈り……………四二

四八 其の九 大根引き……………四二

四九 其の十 四季……………四二

五〇 春のゆかり(お伽韻文)……………四四

五一 實無し栗(お伽韻文)……………五〇

五二 苦勞柿(お伽韻文)……………五四

五三 いぼ蛙……………六七

五四 親心……………七

五五 蜀の三傑……………七
檀溪の騎渡(劉備)
霸陵橋上の訣別(關羽)
長板橋上の叱咤(張飛)

五六 菅公……………七

五七 鬼上官……………八

五八 忠臣正成……………九
元弘の正成
建武の正成
櫻井の正成
湊川の正成
湊川社頭の感

五九 阿新丸……………二二
以上……………二二

一元多情

紫東作

神

有りとし見れば 有るがごと

無しとし見れば 無きがごと

有りや無しやの とに仰げ

依稀たる御かけ 神なめり

人

人とは何か 神ならず

一元多情

されど強ち 物ならず

神にあやかり 物に似て

因果自覺ぞ 人なめる

眼

睜れば熱し 夏の天

弛めば涼し 秋の波

張らぬ弛めぬ 其の中に

寒暑も通ふ 雙つの眼

耳

壁に着くれば 隣ともなり

垣に着くれば 戀ともなる

壁に垣根に 着けずして

許由の耳の 澄みて聞け

口

開けば上下 五千年

閉づれば縦横 三萬里

去來のちから 假初に

有りの荒びぞ うたてかる

一元多情

鼻

物に動けば 慾となり

人に動けば 驕となる

静にあれば 春の暗

えも見ぬ梅の 香をも知る

涙

奸者の眼にも 涙あり

忠士の眼にも 涙あり

涙は同じ むらきもの

心の色は 白と黒

臀

しりとし言へば 人皆は

びろうのものと 笑へども

名利に軽き 頭より

調伊企儼の 臀重し

日本人

死して護國の 神となり

生きて保皇の 民となり

一元多情

同じまことに

家の道

つくす心は

日本人

罪の人

無きをも有りとし

言ひも得ん

有るをも無しとし

見もす可し

無きを有りとし

ありの實を

なしと言ふ人

罪の人

兩舌

信と云ふ字は

人の言

偽と云ふ文字は

人のわざ

人は一人に

玉くしげ

二つの舌の

浅ましき

案山子

黄昏るゝ野に

讎なきも

心ゆるさぬ

手束弓

百結のころも

破れ笠

弓矢とる身の

覺悟よし

鳴子

一元多情

黄熟の野に 板鳴子

引く人無くて 音を絶つも

粒々辛苦 知るならば

追はずとも立て 稻の鳥

霞

花かと思れば 花ならず

雪かと思れば 雪ならず

山の端近く 笑む月の

名残りの息の 其れなめり

花

折れば萎るゝ 折らなくも

やがて移らふ 春の色

神のところに 咲くならば

人のところに あえもせよ

鳳仙花

木影は低う 日は高う

敷石白う 照りかへす

御寮の庭に 一もとの

一元多情

つまくれなるの 花暑し

卯の花

宿を借さぬを 情とも

知らで暮れゆく 野路ゆけば

人の心を 卯の花の

待つとしも見る 下月夜

茨の花

野路の蜘蛛に さ迷ひて

しるべ讀まんと かたへなる

くさむら分くる 袖の下

香ふうばらの 花しろし

女郎花

一と本松の 木隠れに

人の訪はぬを 情とも

思ふて立つか 女郎花

誰が形見かと 問はまくも

をとこへし

一と際高く 道のへに

一元多情

雪かとも見る 色榮えて
 夕べ寂しみ をとこへし
 往く人追ふか 來る待つか

姫百合

翁おうなの 心して
 營なむ庵の つぼ庭の
 籬のあたり 世を占めて
 立つ姫百合の 色ゆかし

子子

溜れる水の 小天地
 鯉懐自得 浮き沈み
 鞠躬如たり 桿如たり
 蚊に成る迄の 覺悟よし

水馬

清むと濁るの 隔なく
 水の心に 任せつゝ
 何すとも無く 面白く
 遊びて暮らす 水すまし

曉の蝶

つばさが露を 厭へるか
 こゝろが花に 通へるか
 おとなふ聲に 夢さめて
 栩栩と飛ひゆく 曉の蝶

雨宿り

ひちかさ雨に 飛び込みて
 此方の軒に 我が立てば
 彼方の軒に 女の子

天眺めて見 拜んで見

夕立

急ぐによきか 急がぬに
 足もと早く 八重雲の
 夕立つ雨に づつぷりと
 濡れて走せゆく 男の子

自修

歡談絶えて 自修室
 呬唔の聲も 胸の中

一元多情

苦辛可堪と

舎監室

柱時計の

音ひびく

試験

飛燕空しく

闘野を掠めて

バット操つる

音も無し

手走るあられ

窓打つは

奮闘のペンか

セコンドか

歸省

年々に見る

色なれど

今年ばかりは

取り分けて

美しと見る

我が家の

若葉の門に

父と母



一元多情

一七

一六

野 球

某中學校にて野球會を見たるとき

先づ飛んで來る ニアボール
 扱ハイボール ローボール
 次第に熱する 投手の手
 打手轉瞬の 油斷なし
 一振二振 自重して
 いざ三振の 生か死か
 時利あらずも フルベース
 腹背の敵 意氣昂がる

投手虎搏の 臂張りて
 敵の呼吸を うかゝへば
 捕手螻螂の ねらひ腰
 萬一失の あらんかは
 在さば守れ 神ねぎて
 打手満身の 力瘤
 入れつ出しつ 敵味方
 觀衆ともに 汗握る
 あわや飛電の 球飛べば
 颯と三尺の バット打つ
 熱球飛んで 三壘の

壘手かすめて 滑走す

此の時はやく ファイルダーは

猿臂躍つて 掬ひ取り

打てばホームに 球は飛ぶ

球の下には 走手飛ぶ

こゝ瞬間の 生と死は

審判官の 胸に待つ

ベースを握る 走手の手

飛球を攫む 壘手の手

間一髪の たがひにて

セーフの聲は 投げられぬ

敵も味方も 観衆も

拍手の響 山振ふ

庭 球

某女學校にて庭球會を見たるとき

コートに上る 白と赤

襷ゆかたに 敵味方

互にかはす 黙禮も

しとやかに 其の陣に就く

赤の打ち出す フェヤボール

心得たりと 白酬ゆ

前衛深く 打ち込めば

後衛かろく フライ打つ

バウンド待ちて カッチング

カーブの球は ラツケット

抜けて袴の 裾に入り

一零で白 敗れたり

續いて打ち出す 第二戦

白サーバーの 球強く

赤油断なし 斜に受けて

敵の右翼の 虚を衝けり

衝かられても白 狼狽へず

後衛躍つて 敵陣の

右角に深く 打ち込めは

防く手なくて 赤敗る

一對一の 好マツチ

扱決勝の 最後戦

白敗るゝか 赤勝つか

満場胸に 波躍る

時をはかりて アムバイア

プレーの聲の いさましく

此所ぞときほふ 女同志

飛燕狂蝶 みたれ舞ふ

ジュースの數も 重りて
 一決戦にて 白勝ちぬ
 満場ドット 拍手湧き
 紫紺の袴 風そよく

ボートレース

猪苗代湖上ボートレースを見て

夜來の雨は 名残りなく
 霽れて新樹の 色も濃き
 緑りの霞 玉だれの
 湖畔を包む 初夏の天

行餘の技を 競はんと
 撰手の腕に ちから瘤
 籠むる手堅く スタートニ
 オール絞りて 息を呑む
 忽ち起る 號砲に
 舷々飛沫 雪と散り
 勢ふ漕手 いきむ舵手
 白赤と呼ぶ 聲高し
 應援の聲 嗷るゝ頃
 ヘビーの聲は 投げられぬ
 最後の一分 決勝の

漕手阿伝の呼吸せまる

紅か白か 紫か青か

色に優劣 分かぬ時

猛然一蹴 隼號

半艇身を 抽いて勝つ

擊 劔

武徳會大會に臨み模範仕合を見て

花は櫻の 散にしを

人は武士のみ 集ひ來て

尙武の道に 遊ぶ日の

天は五月の 若葉かげ

雨々徐々と 立ち合ふて

氣合の聲は 敵味方

差し合浮き舟 浦の波

寄する手許に 油斷なし

再び三たび 繰り返へす

氣合は頓て 一轉機

兵字に開く 老武者の

敵若武者は 正眼に閉づ

離れて結ぶ 虚實の道

彼れ先づ撃つか 此れ突くか

一元多情

滿坐握中に

汗ある時

武者滿身に

呼吸あり

あはや霜隼

搏つと見る

刹那飛電の

梭と飛び

籠手に寄れば

開手に

薙手と見れば

十文字

寄すれば退り

退けば寄せ

進退周旋

機微の間

卷舒通塞

目のあたり

見る權實の

武士の道

學ぶ我

照る日の父の

御ことばに

我れ學び舎に

出でゝ行く

恵みの母の

待つからに

頓て我が家に

歸り來つ

昨日も今日も

亦明日も

往きては學び

歸りては

習ふが習ひ

神ながら

誠の道の

一と筋を

誠の道に

かなひなば

一元多情

我れ助く可き

神在ます

大和島根は

其の昔

神の造りし

國なるぞ

古今東西

不二の國

學ぶ我等は

甲斐が根の

千古不滅の

雪清く

方寸の玉

磨かゝまし

磨くや石も

玉となり

鐵百鍊に

靈奇しの

精光は昔

武士道の

魂の今尙ほ

叫ぶ見よ

祖宗の道の

ゆるぎなき

海の國なる

大和船

國の光の

旗たてゝ

致智勤行の

棹さゝん

致知勤行の

棹さして

太平洋に

纜解きて

列國環視の

たゞ中を

舵操つりて

吾れ行かん

こゝ千頃の

荒磯海

浪萬段に

砕けても

砕けぬ心

一と筋に

一元多情

國威張る可き 基置かん

干霄の樹は 本深し

やがて萬朶の 花となる

本を修めて 學ぶ哉

自強の覺悟 あらめやも

春の曙

霞に暮れし 春の夜は

同じ霞に 山の端も

空も一つに 朝ぼらけ

夢尙ほ花に 香ほるなり

香ほる夢路を 我が往けば

花我れか はた我れ花か

五蘊の塊は あめつちの

化育に通ふ 春のあけぼの

夏の日盛り

きらりくくくと 明くる夜に

草木の梢葉 はや萎ほる

ぢりりくくくと 長くる日に

屋瓦爛れて 火焰吐く

草廬の窓に 風消えて

一元多情

汗しどろなる

生の身は

天女の五哀

其れかとも

みだれて苦し

夏の日盛り

秋の夕暮

鳥は埒に

急げども

叢いまだ

幽語なし

里の烟は

夕榮を

罩めて刻々

うすれゆく

晝已に去りて

夜はまだき

去りて來ぬ間の

一と時を

縫ふて家路に

歸りゆく

耕夫さびしき

秋の夕暮

冬の夜寒

月を結べる

霜踏めは

一步々々と

影凍る

板戸隙漏る

風遮れば

肌に碎けて

響あり

訪ひ來る人の

無ければや

寒燈の下

世を占めて

身は終宵の

寒蝸牛

一元多情

わぶるは冬の

夜寒なりけり

三六

田園の趣味

其の一

春の畑

彼岸も過ぎて 瓜や茄子

種子裁ゑんとて 猫ぐるま

肥料を積みて 花縫ふて

春の日遅々と 押してゆく

田園の趣味 昨日今日

其の二

田 植

眠むげに梅雨の 空霽れて

照るや山田に 里の子が

手拭白う 帯赤う

歌長うして 早苗挿す

田園の趣味 昨日今日

其の三

麥刈

雛の雲雀は 巢立ちしぬ

一元多情

三七

屈む麥の穂 片手にて

刈りて片手に 母戀ふる

子守が背の 乳子まねぐ

田園の趣味 昨日今日

其の四

麥打

赭き膚に 黒き汗

拭く暇もなく 繰り返へす

連枷の音や 麥の秋

塵も埃りも 里の花

田園の趣味 昨日今日

其の五

田檢り

朝露しげき 田のくろに

水の手守りて 我が居れば

もや吹き分けて ふうわりと

送る稻葉の 風かほる

田園の趣味 昨日今日

其の六

草とり

驟雨霽れて 土濕める

さて後園に 耘れば

甘藍青く トマト赤

茄子紫に 瓜白し

田園の趣味 是れや此の

其の七

晝休み

ほどろを敷きて 業休み

田居の木蔭に 汗拭けば

天門萬里 長風の

稻葉を分けて 訪つるゝ

田園の趣味 是れや此の

其の八

稻刈り

辛苦が秋の 實となりて

黄金波よる 千町田に

祝ぐや田子の子 利鎌もて

稻を刈りつゝ 眺めつゝ

田園の趣味 是れや此の

其の九

大根引き

霞も立てる

小春日に

山の畑に

大根引く

力餘りて

尻もちを

つくやはづみに

紅葉ちる

田園の趣味

是れや此の

其の十

四季

春はすみれや

れんげ草

秋はすゞ虫

くつわ虫

天與無盡の

景物は

さゝぬ庵の

前後

田園の趣味

是れや此の



春のゆかり

兄つくつくし妹すみれ

肌さす風も 和ぎて

春の日遅々と うつろへば

世に後れじと あらがねの

土つんざきて 土筆

やをら頭を つき出せり

此所は何所ぞ 春日野の

野守やいづこ 友やある

おとなへど野は 寂として

春こと傳てん 人あらず

昔かたらふ 友あらず

在らぬ野守は わりなくも

友垣如何に 契りおきし

去年の言葉は 武藏野の

たのむが岡の 葛の葉の

ふかき恨の やる瀬なき

ふうわりと吹く 春風に

香ふあたりを 見渡せば

もの言ひさして 枯れうばら

しげみがもとに 悄然りと

淡むらさきの 花一ツ

御身は誰が子 如何にして

ここへは來にし 名は何ぞ

我は面かげ 醜なれど

心すぎ菜の わすれ子の

春のかたみの つくつくし

我が身はちよこ 母そばに

別れて今は みなしごの

たのむは數の 姉あれど

其れさへ遠く へだよりて

あわれはまさる 花すみれ

すみれと聞けば 實にや實に

矢立の坪に 似る姿

我は其の柄に 宿かりて

思ひを寫す 水莖の

筆とぞ人に たゞへらる

さらば我が身が 宿す露

君がみ筆の 穂にそめて

み空の姉に おとづれよ

野邊のつれづれ 春來れど
わびてや君が 影なしと

やよすみれ子よ 如何にして

遠きみそらに おとづれん

天の河原に かさざきの

渡せる橋の 其れさへも

頼みなき世は 是非もなし

あわれ我が身は 罪なきに

獨り此所には 残されて

ゆかりも深き 袖の色

誰にか見せん 今はたゞ

言問はまくも いぢらしき

わづらひなせそ 神集ひ

許るすえにし の 兄いもと

我が身は兄の つくし筆

御身は妹 すみれつぼ

野邊のちぎりの 色深し

頓て野守の 訪ひも來て

春のさきがけ　はらかならの
 ゆかりを傳ふ　都人
 わびにし心　すみれ草
 春のうたげも　つくづくし

實無し栗

人の罵り　鳥の飛ぶ
 昔にさそはれ　花さけば
 鳥は子飼ひに　忙しく
 人は田植に　いそがし
 飼はるゝからに　子は育つ

植うれば頼て　穂は實る
 輪廻のちまた　我ひとり
 梅雨のながめに　後れめや
 人訪はぬとて　怨せず
 鳥歌はぬも　憂せず
 我は色香を　餘所にして
 實に味を　ほこる可し
 降りしく雨を　伴として
 散るを急げば　其の色は
 はや移ろひて　あらがねの
 土にかえりて　實は成れり

深山かくれの　　高き樹の

其の樹の梢に　　實は成れり

鳥ついはむな　　人摘むな

いがは蜘蛛手に　　針をもつ

毳彙の中には　　三つ栗の

中睦まじき　　はらからが

滑せる革を　　身に甲ろひ

寄りて助けて　　日立ちゆく

日立つ其の實を　　護らんと

毳彙は次第に　　膨らみて

蒸す日整す蚊の　　厭ひなく

健げに其の實を　　抱き居れり

頓て夏過ぎ　　秋は来て

田植ゑし里の　　人々が

稻のみのを　　祝ふ頃

同胞も亦　　みのりたり

あな美しき　　はらからや

産毛小さく　　結ひ上げて

くりに染みたる　　鎧着て

光澤ある肌　　肉充てり

永の保育の　　甲斐ありて

熟りを見たる　　嬉しさに

毬彙はさすがに　　ほゝ笑めば
うたてや栗鼠に　　食はれたり

苦勞柿

ひゆうくと吹く　　木枯らしに
ぶらんこのごと　　揺すぶられ
到頭へたを　　ちぎられて
谷間の家の　　坪庭に
骨も砕けと　　投げられた
投げられたれば　　さなきだに
地體かよわき　　澁の身の

膚はやぶれ　　肉つぶれ
汁はながれて　　川のごと
核は突き出て　　山のごと
頓て程經て　　此の家の

五歳の九郎が　　見付け出し
奇麗な柿だ　　甘さうだ
食べても可いかと　　母に問ふ
いとえ食べては　　なりませぬ

食べたいならば　　其の種を
取つてお庭に　　栽ゑなさい
柿八年で　　實を結ぶ

お前が學校

おさがりの

年に澤山

みのります

九郎よろこび

下駄の齒で

種子押し出して

裸にし

扉のあたりへ

蹴飛ばして

早く芽を出し

實を成らせ

年忘れては

ならないぞ

投げられ踏まれ

蹴飛ばされ

其の上肉を

はがされて

つらいことだと

思つたが

是れも宿世の

因縁で

芽を出さなけりや

ならぬ役

早く芽を出し

賞められよと

あせつて見たが

何がさて

冬も日焼けの

砂の上

晝は渴いて

呼吸がきれ

夜は凍えて

鞆がきれ

到頭春の

回へるまで

飢や凍えに

惱まされ

氣力次第に

衰へて

崩ゆるはおろか

命さへ

やつとのこととで

取り止めた

春が来たれば 後れじと

冬の疲れに 瘦せし芽を

やうゝゝ出して 見は見たが

足も止まらぬ 砂の上

其の上肥を 呉れられぬ

肥が無くては 延びられぬ

一年経つて 二三寸

二年経つても 五六寸

七年八年 経ちたれど

漸く尺と 八九寸

二尺に足らぬ かたゐもの

物の役には 立たぬ身を

九郎は其れと 心なく

已れは今年で 学校の

課業残らず 卒業だ

お前今年で 八年の

約束どほり 實を成らせ

成らなきや其の枝 ちよん切るぞ

返事はどうか 否か應

言はなきや其の根に 針を刺す

ちよん切られても 刺されても

やつれゝゝし 此の身には

とても實りは 叶はぬと

言はんとしては 澁柿の

悲しや口は 澁りたり

辛き思ひの 胸の中

九郎悟らず 腹立ちて

今は我が身が ワシントン

父のみやげの ナイフにて

切つて了ふと 身構へり

九郎何だと 母の聲

急いては事を 仕損ずる

柿も今年で 八年目

意地にも成らずにや 居ませぬぞ

心静めて 待ちなさい

九郎心を 静めても

静まらぬのは 柿の胸

義理と情の 母が言

思ひ迫つて 武者振ひ

途端に涙 四つ五つ

悲憤滴る 血の涙

此れが今年の 實のもとゐ

身を割いて食ふ 苦しみを

神やめでけん 六つ七つ

やつと九つ 苦勞の實

九つ成つた 實が成つた

九郎毎日 數へては

早く大きく 成つて呉れ

鼻を撫てたり 擦つたり

頭つかまへて 引つ張つたり

時々ポチを 連れて來て

ざれ付かせたり 噛ませたり

ひとの心を 餘所にして

自分本位の 人ばかり

うるさきものは 世にも無し

うるさき上に 人心

足で蹴飛ばし 手で撫で

腹を立てたり 笑ふたり

百面相の 走馬燈

廻りて天地の 秋は來た

森の公孫樹葉 うら枯れて

籬に菊の 香ほふ頃

やつれながらも 九つは

餘所に後れず 色つきて

艶も一と際 まさりたり

隣り近所の 子供等が

里柿あさる 様見ては

九郎も今は 待ちかねて

もぎるはいとし 枝の儘

艶ある肌には 喰ひ付いた

澁うい澁い おゝ澁い

永の月日の 恩愛を

仇に報ゆる 恩知らず

掘つて捨てる と 腹立ちて

鍬をかついて 敦圀けり

九郎何だと 父の聲

柿は澁きが 性質だ

澁きが霜に さはされて

都人等の 持てはやす

甘露滴る 鄙熟柿

頓て秋更け 霜降りて

里の甘柿 子供等に

あさり盡くされ さ枝のみ

空しく風に さけぶころ

澁柿の色 日に榮えり

奇麗な柿だ 愛らしや

珊瑚の肌には 玉のつや

甘露の味を 身に占めて

脊の小さきが 珍らしと
来る人ごとに 賞め稱ふ

されば此の家の 父と母
其の子の希望 實になりて

たゞへ言聞く うれしさに
名をさへ附けて 九郎柿

家の寶と いつくしむ

幸か不幸か 八年の

大難小難 苦勞の實

深紅を装ふ 霜ねりは

坪庭の榮 身の譽

艱難汝を 玉にもす

いば蛙

女學生を連れ某の宮奉迎の或る時

雨のしよぼよぼ 降る中を

宮様迎へ まつらんと

町外れなる 濠端に

直立不動 我が居れば

彼方の岸の 石垣の

隙間にすめる いば蛙

苔の注連繩 押し分けて

突如頭を 突き出せり

數ならぬ身の 我も亦

千載一遇 今日こそは

宮の御姿 拜まめと

やさしきいぼが 心がけ

いざ入り給へ 此方まで

此方優しき 女學生

汝をいたわりて 諸共に

尊き姿 拜ままし

いざゝゝ來ませ いぼよ疾く

疾くと呼べども 應へなし

是れは不審と よく見れば

悲しやいぼは 遂にいぼ

紫紺の袴 おごそかに

並ぶ姿を 餘所に見て

警蹕の聲 いかめしく

響く馬蹄を 仇に聴き

流れに遊ぶ 水すまし

唯一と口に 食はんとて

一と筋に唯 眼を睜り

満身堅き 息づかひ

隙もやあると 覘ふは

五月雨しきる 田の畔の

鷺のうしろの 莊周が

流轉を悟る 穢土の淵

親心

都大路の たそがれて

街燈の光り 照らす頃

足もと暗き 小路より

子を先たてゝ 母一人

米賣る店の 前に立つ

店には數の 實り物

赤き林檎に 黄の密柑

さては柿栗 蟻の實と

瓦斯の光に 色まして

とりと味を 誇り顔

母は氣にしも 留めずして

携へて來し 風呂敷を

そと番頭の 前に出し

「お米五合」と 言ひさして

そむける顔に ぼうの顔

見合はす親と 子の顔に

其れと知りたる 母の胸

林檎か柿か さるにても

米の代さへ なけなしの

貧しき今日を 如何にせん

富み貧しきの ゆるよしを

知らねど母の 不興顔

見るがつらさに 其れとしも

言ひ出しかねて 母の顔

見ては林檎を 眺むる子

言はぬは言ふに ます思ひ

顔そむけても ぼうの顔

五たび六たび しぬびの眼

番頭が出す 米づゝみ

手に取りかねて わぶる母

物に慣れたる 番頭は

包みを置きて 其所去れば

母はやうゝゝ 手を延べて

握りし銅貨 十錢を

引換へに持つ 米包み

「愛兒や歸ると せつかれて

むづかりもせず 母よりも

先きに駆け出す 後かけ

可愛さ増して あとや先

一元多情

往きぞ煩らふ 母子草

我が身は飢えず 飽かなくも

此の子の望み 足乳根の

親の心は 足らへりと

終日業に 飢え果てし

我を忘るゝ 愛の母

どうぞ此の米 一合を

もとに納めて 其の代り

林檎一つを 此の子にと

差出す包み 番頭が

諾なふ聲は うるみたり

七四



▲檀溪の騎渡

襄陽の宴 たばかりて

傑士杯前 危機せまる

脱兎の路の 窮まりて

神助も今は 盡くる時

的盧一鞭 檀溪の

一元多情

七五

飛沫を銜いて 難に活く
劉玄徳は 神かしも

▲霸陵橋上の訣別

下邳城の旗 色淡く

義士投降の 怨濃し

頓て魚信の 傳はりて

盟主の所在 知りたれば

赤兎直ちに 追へば追ふ

恩主に別る 霸陵橋

關雲長の 節義見よ

▲長板橋上の叱咤

景山の驛 秋ふけて

壯士露營の 夢寒し

四更の空の 星冴えて

夜襲の敵の 囂むとき

長板橋上 叱咤せば

十萬の敵 たじろけり

張翼徳は 鬼かしも

菅公

玉の宮居の 藤かつら

亭子の院の 御意深く

根を絶ち枝を 枯らさんと

百里の命を 君に寄す

讒奸の舌 毒多し

賢相空しく 冤に坐す

昌泰四年 正念五

延喜元年 春二月

肌尙ほ寒き 風浴びて

無實の罪を 身に被ぎ

衛士に伴れられ ゆくよしも

宿の梢は 秦嶺の

雲に隠れて 影見えす

賢相の感 將た如何

公の歌

君が住む宿の梢をゆくよしも
かくるよまでに かへりみしはや

紅梅殿の 梅の花

春忘れずに 咲きてしも

大庭の 藤かつら

蜘蛛手八つ手に しがらみて

一元多情

八〇

香おこさん 隙もなく

御足空しく 泥に染む

讒奸曷ぞ 亡状なる

公の歌

こち吹かば香おこせよ梅の花
主なしとて春な忘れそ

かわける程の 無ければや

西府楚囚の 身となりて

語らふ友は 敗屋の

庇を漏るゝ 月影に

形影空しく 相吊す

世に通塞の 數あるも

身に朝夕の 感無けん

公の歌

雨の降りし時

天の下かわける程の無ければや
きてしぬれ衣ひるよしも無き

野にも山にも 夕されば

立つや烟の 歎きより

まさる恵は 大君の

恩賜の御衣は 此にあり

讒奸の舌 毒あるも

遷客の口 怨嗟無し

賢相何ぞ 偉大なる

一元多情

八一

公の歌

夕されば野にも山にも立つけふり
なげきよりこそ燃えまさりけれ

公の詩

去年今夜侍清涼
恩賜御衣今在此
秋思詩篇獨斷腸
捧持毎日拜餘香

旅雁歸りて 復た來たり

春花開きて 復た凋む

孤囚の身には 去來なく

帝都に夢の 通ふのみ

顔容日々に 衰へて

千里誰にか 訴へん

賢相遂に 歸らぬか

公の詩

聞旅雁

我爲遷客汝來賓。 共是蕭々旅漂身。

欵枕思量歸去日。 我知何歲汝明春。

延喜三年 春二月

念五の夜半の 筑紫瀉

不知火消えて 結すぼるゝ

闇を破りて 星一つ

落ちて光芒 跡長く

紫微を繞りて さ迷へり

嗚呼雄魂去りぬ 天沈々

一元多情

國歩艱みて 菅の根の

思ひ亂れし 跡訪はゞ

安樂寺畔 千早振る

神の御稜威ぞ 仰がるゝ

誠の道は 神ながら

百世に千世に いや高し

嗚呼天滿大自在

公の歌

心さへ誠の道にかなひなば

祈らずとも神や守らん

鬼上官

虎伏す野邊も 主君が爲め

一命軽く 義は重し

時は文祿 元年の

豊太閤の 外征ぞ

神后ありて 此の方の

震天動地の 雄圖なる

元帥參謀 其れゝゝに

人定まりて 清正は

先鋒の命 承はり

一元多情

天草の灘 軍舟

纜解きて 堂々と

八重の潮路を 急ぎ行く

風順にして 矢と走る

舟熊川に 乗り捨てよ

名さへ目出たき 慶州を

蹂りて頓て 主君が爲め

盡くす心の 忠州と

無人の境を 行くがごと

さて王城を 屠らんか

別將小西 行長の

女々しき心に 阻てられ

後れを取りし 遺恨さは

穂にこそ出でね 丈夫の

胸は手束の 弓と張る

いざ國王を 擒にし

會稽の恥 雪がんと

長驅七旬 會寧府

二王子を得て 嫌らず

八道の野を 後にして

一氣大明を 衝かんとす

女眞の敵は 幾萬騎

拂へど續く 蟻の群

決河滔々の 勢に

弓折れ彈丸は 盡き果てゝ

短兵せまる 鎗先に

木枯しと散る 敵あはれ

進めば頓て 兀良哈

さすが故國の なつかしく

馬を砂上に 驅り立てゝ

望めば雲か 將た山か

黛うすく 影見えて

心の真砂 千々に散る

日逝き月逝き 年ゆきて

鏡城の春 雪ふかく

孤軍進みて 又進み

敵城破りて 又破り

安邊城頭 喝破せば

大明の使者 肝膽寒し

百萬の敵 挫じくとも

世に悪む可き 小人の

心の敵を 如何にせん

行長輩の 讒言に

罪なき罪を 身に負ひて

一元多情

箆功空しく 師を斑へす

九〇

されど心は あふひ草

主君に向ひて 束の間も

かれぬ日影は 神ぞ知る

無實は頓て 晴れたれど

群小機宜を 誤りて

八道の空 復た曇る

虎伏す野邊も 主君が爲め

一命かろく 義は重し

箆功のうらみ 姨捨の

曇らぬ月の 眞ごころに

再征の命 承はる

身は奉公の 鑑かも

蔚山の敵 四十萬

孤城のまもり 援けなく

矢竭き彈丸竭き 糧つきて

竭きぬは獨り 奉公の

心は往昔 沈竈の

蛙の例し 數ならず

生者必滅の ことわりは

有待なかく 頼み無し

慶長三年 八月に

一元多情

九一

一元多情

太閤秀吉 殂かりて

震天動地の 大業も

鎧の袖の 露と消ゆ

虎伏す野邊も 主君が爲め

一命かろく 義は重し

前後七年 外征の

鬼上官の 忠勇は

異國までも 歌はれて

弓矢とる身の 譽にぞ

忠臣正成

▲元弘の正成

承久の凶熖 百餘年

王朝の政 衰へて

歩みも難む 相模路の

鎌倉山の 星月夜

鹿の子班に 世は亂る

元弘の天子 後醍醐帝

英武の君に ましまして

中興を思ひ 立たせ給ひ

一元多情

一たびは無禮講を企て

二たびは僧徒に結び給ふ

斯くと知りたる兇賊の

罪障うたふつむがりの

太刀かざしたる叛逆に

畏けれども蒙塵の

禍遂に免かれさせず

天津日の御子治しめす

六十餘州妖雲の

折り重なりて久方の

光をもらす隙もなく

只さして行く笠置山

頃は元弘元年の

黄金も溶かす葉月の日

松の下露御裳裾の

流れ尊き御心を

深く惱まし奉る

嗚呼天子は至尊兵以て侵す可からず

勤王は大義利以て紊る可からず

兇賊何の咎めありて

一天萬乗の大君を

斯くまで惱まし奉る

一夕聖體 疲れさせ

苔の蔭に うたゝ寐の

うたてき夜半の 楠の夢

藤房卿に みことのり

楠木兵衛を 召し給ふ

楠木兵衛 正成は

君の命と 聞くよりも

髻むすぶ 暇もなく

假の笠置の 宮まうで

雲井遙かに 額づきぬ

藤房卿の のたまはく

高時世々の 武威を承け

上は皇家の 權を攘み

下は萬民 蒼生を虐け

剩へ至尊を 廢立し奉らんとす

天皇赫怒 六師を擧げて

不臣の罪を 正さんとし給ふ

兇賊生れて 忠義を知らず

征矢を番へて 逆しまに

皇師を惱まし たてまつる

汝皇家の 恩を知らば

あつき繪旨を 畏みて

笠置の山の 松のかげ

御袖を濡らす 露拂ひ

叡慮を安じ たてまつれ

命せ畏み 正成は

暫し言葉も 夏の空

なやませ給ふ 御姿を

幽かに拜み たてまつり

聲涙ともに 顛へつゝ

筑紫のかぎり 陸奥の果

住とし住める 民ぐさは

誰か王臣に あらざらん

微臣正成 つゝしみて

討賊の命 承たまはる

兇賊たとひ 猛くとも

微臣の生命 有るからは

叡慮を惱まし 給はざれど

唇の未だ 乾かぬに

赤坂の城 はや成れり

笠置に勝てる 賊兵は

潮のごとく 押し寄せて

伏せ勢吊り垣 煮湯の雨

降り来る奇計に 膽も冷え

重圍持久の おぞましき

事に臨みて 畏るゝは

勇者の心 しかすがに

孤城の守り 頼みなく

死を偽りて 正成は

金剛山に かくれたり

時勤王の 聲熄れて

元弘二年 ささらぎの

春の日影は 天雲の

向伏す果ての 隠岐が島

御幸ませしぞ 畏こかる

微臣の生命 あるからは

叡慮を惱まし 給はざれと

誓ひまつりし 言の葉を

仇にやす可き 住の江の

高橋は墜ち 隅田流る

死せる正成 復た生きて

千早の城は いきはひぬ

百萬餘騎の 敵勢を

攻め苛なむる 旗風に

勤王の聲 復た起る

事天聽に 達すれば

元弘三年 いやおひに

假りの宮居の 一と歳を

隱岐が小島に 船出して

名和の湊に 入り給ふ

世は人皇の 九十五に

天下亂れて 主艱む

東魚來りて 四海を呑み

日の西天に かくるゝこと

三百七十有余日

西鳥來りて 東魚を食み

海内一に歸すること三年

獼猴天下を掠むる三十餘年

大凶變じて 一元に歸すと

上宮太子の 未來記しるし

さて時の間に 鎌倉は

刈菰の世と かき亂れ

元兇やがて 亡びたり

天日始めて 明かに

鳳輦都に 向ひ給ふ

正成郎黨 引き具して

迎へまつれば 畏くも

數の御言葉 菊水の

一元多情

旗を御先に 還御まし
中興の大業 茲に成る

108

▲建武の正成

前狼後虎 事復た非

建武二年の 神無月

神の心も さる冠者

足利尊氏 謀反して

回天の業 復た敗る

微臣の生命 有るからは

叡慮を惱まし 給はざれど

誓ひまつりし 言の葉を

仇にやす可き 攻め守り

畿山の草木 色あせぬ

八十萬騎の 敵勢も

頽勢遂に 支へ得ず

豊島河原の 敗績に

全軍の意氣 沮喪して

遠く筑紫に 落ちてゆく

拂へば来る 夏の蠅

延元元年 五月雨の

海と陸とに ふり分けて

一元多情

105

一元多情

悪運盡きぬ 尊氏は

又も都へ 攻めて寄す

戦の道 一ならず

臣に攻守の 策有りと

されど良計 沮まれて

感慨限り無し 正成は

子を呼び寄せて 一ふりの

太刀をかたみに 賜はりて

歸へれ正行 父は往く

往いて兵庫に 果てぬ可し

父が子ならば 亡き後の

日影かざらふ 雲分けて

九五を正し たてまつれ

涙を拂ふ 暇もなく

馬に跨り 湊川

流れも清き 菊水の

しるしの旗は 木隠れて

父は兵庫へ 子は河内

▲湊川の正成

味方の勢は 七百騎

敵はと問へば 五十萬

一元多情

決死の身には 迷なく

奔馳突撃 刀折れ

力も今は 盡き果てぬ

來れ正季 武運盡く

一念茲に 留め置きて

一身俱に 果てぬ可し

いざと刀を 取り直し

扱今生の 願ひ何

正季端然と 向き直り

悲憤の涙 ふり拂ひ

義忿に顫ふ 聲呑みて

義に死す身には 願なし

七生報皇 是のみと

可しと正成 首肯きて

後生を誓ふ 掌を結び

京都の方を ふし拜み

君在す方を 枕とし

腹かき切て 神去りぬ

▲湊川社頭の感

七百歳を 後れたる

大正二年 夏五月

兵庫の浦に 碧血の

湛ふる跡を 訪ねんと

往けば若葉の 緑濃し

桑滄の變 湊川

流れは涸れて 碑の

頭に立てる 老松の

しらべは波か 千早振る

護國の神の 御聲かも

阿新丸

大内山の 片ほとり

雙の岡の 佗すまひ

父懐しむ 稚兒一人

夫戀しむ 母ひとり

稚兒は其の齡 十三の

春まだ若き くまわか丸

母は三十路を 四ツ五ツ

資朝卿の こひしづま

母にあやかり 父に似て

やさしく強き

阿新丸

文武の道に

いそしみて

日毎に通ふ

稽古の庭

ある日稽古の

業終へて

家に歸れば

常に無く

憂にしづむ

母の顔

乾く涙の

痕さへも

母上今日は

如何なれば

御氣色勝れ

給はぬぞ

濕り勝なる

初夏の空

心地悪うて

おはするか

問はれて又も

さみだるゝ

みだれ心の

あとや先き

とみにも應へ

泣く母は

やがて涙に

くもる聲

やよ聞き侍れ

阿新よ

父は父はと

言ひさして

またも涙に

かきむせぶ

さまに阿新

氣をいらち

父上如何にか

し給へる

異郷の風に

さはりしか

邊土の雨に

なやみしか

母上さなりや さあらずや

否とよ父は さはり無く

艱ましも無く おはすれど

東方吹く風の 恐ろしく

死罪と言ひて 又むせぶ

母上何と の給ふか

父上罪に 死するとや

罪なき罪に 死するとや

其は夢にては おはさずや

便りに其れと 聞きにしが

父のころを しろしめす

神は誠を 守るなめり

胸をな痛め 給ひそよ

母の言葉を 聞くよりも

神に祈るか 阿新丸

雙の手確と 膝に置き

うな垂れし儘 言葉なし

暮るゝ嵯峨野を 隈どりて

正邪を糾す 神垣に

身を卯の花の 雪かとも

まがへる影ぞ うたてかる

夜も漸々に 更けたれば

母に誘はれ 阿新は

夜の臥戸に 入りたれど

夢路たゞよふ 越の海

終夜夢の 行きかひに

身は幾たびか 佐渡が島

囹圄の父に うなされて

覺むれば夢の 夜は明けぬ

ゆるせ母上 我は往く

いまそかる中 今一度

父の御顔を 拜まんと

海山越えて 我はゆく

やよ阿新よ 狂へるか

神の助に 汝が父は

頓て事無く 歸るさを

急がぬ程に 待つぞよき

否父上は 遠郷の

囹圄の庭の 一日草

明日の日知らぬ 短夜の

命はよべの 夢のつげ

あはれ母上 是れや此の

今生の別れ 父上の

暫しなりとも 面影を

拜まん暇

たまひてよ

父のあはれを

思ひ遣り

子の悲みを

推し料り

如何はせんと

とつおいつ

極め兼ねたる

母の胸

母上ゆるし

給はずば

我身は果てし

魂となり

天がけりても

佐渡が島

父上がり

いも往かん

往けよ阿新

去りながら

待つ身の母な

忘れそよ

父の運命

つたなくて

返らぬ怨

よし有るも

汝は歸り來よ

母が許

母に事へて

人と成り

さて大君に

盡すこそ

父の子としも

言ふ可けれ

結ぶ小笠の

緒もかたく

母に誓ひて

いとま乞ひ

一人の下部

召し具して

越路とわたる

雁の列

母に別れて

父の實に

いつ逢坂の 關越えて

世は空形の 近江路や

數の山川 越のそら

父に一日近づけば

母に一日 遠ざかる

日數積りて 十三日

敦賀港に 出でにけり

船の便りも ついでよく

風も追手に 波はやく

飛ぶが如くに 四十五里

越ゆれば此所ぞ 佐渡が島

さて父上は 佐渡守

本間入道 山城が

館に在りと 聞くまゝに

其所へと急ぐ 主と従

往く手に高き 屋の棟の

端に人食ふ 鬼瓦

父の身咒ふ 占かとも

見えて恐ろし 磯やかた

門の構へも いかめしく

番衆あまた 往きかひて

縁り無き身の たやすくは

入る可き傳手も 無きまゝに

如何はせんと 中門の

あたりさ迷ふ 折しもあれ

内より僧の 出でゝ来て

仔細やあると 言問ひぬ

我が身は遠く 都より

父上戀ふて 來りたり

罪に死すべき 父上の

御跡慕ひて 來りたり

あはれ御僧 心あらば

今生の別れ 恩愛の

父の御顔を 面のあたり

拜みまつらせ 給ひてよ

生きて別るゝ 其れさへも

別れとあらば うきものを

死にて別るゝ 親と子の

うれたき心 思ひやり

僧は眼を しばだゝき

ともかくもとて 内に入れ

さて事のよし つばらかに

本間入道に きこえたり

聞きも終らず 山城は

死す可き罪の 重き父

子なればとても 其の願

今生に得も かなふべき

強てとあらば 父の跡

追ふて常夜の 夜見の國

半坐を分けて 親と子が

宿世かたらひ 得さすべし

僧は是非なく 退り出で

有りし次第を ねんごろに

告ぐるもあはれ 親と子の

恨は一つ 身は二つ

神在しますか 在すならば

今生のねがひ 鹿の角の

束の間なりと なつかしき

父の御顔を たゞ一目

か弱き脚に 山坂を

越の白雪 ふりはへて

來し思ひ子の 面影を

しぬび目なりと 唯一目

時は五月の 末つ方

五月雨頻る 夕間暮

盡きぬ恨を 名残りにて

資朝卿は 斬られたり

有待是非なし 消えし身の

靈魂はいづこ 亡き骸の

骨のみ僧の なさけにて

孝子におくる あだ形見

消え入るおもひ こひし鳥

ひたと取りつき 血を泣くも

形見はとはに しづかにて

歸らぬうらみ 是非もなし

さて有るべきに 有らざれば

思ひかへして かたみのみ

下部に持たせ 都へと

送り返して 身はひとり

本間が館に 留まりて

頼む神さへ 在らぬ世の

うらみの刃 誰にかも

返へさばやとし 煩らへり

相模入道 高時ぞ

不俱戴天の 仇なれど

星影とほき 鎌くら山

指して辿らん 術もなし

近きは本間 入道ぞ

我が身の怨 父の仇

思ひのほどを 知らさんと

隙をうかぶふ 孝子の刃

俄にすさむ 夜の空

窓うつ風と 雨の音

紛れて忍ぶ 阿新丸

覺悟はしるし 仇の寢戸

やは逃さんと 身構へて

内の様子を うかぶへば

敵はあらず もぬけのから

とばかり呆れ 外に立ちて

思案にくるゝ 折しもあれ

あらしの音の ひまゝゝに

次なる間にて 立ついびき

是れやあらぬか 目さす仇

障子すべらし ぬけ入りて

見れば燈火 あかき陰

本間三郎 たゞひとり

前後みだして 寢入りたり

時にとりての 仇なりと

灯陰しのびて さし寄れば

蛾の飛び入りて 燈火は

消えて常暗 機りぞよき

はたと枕を 蹴なぐりて

驚き覺むる 三郎を

刺す手反して 我が腹を

刺さんとしては 母が言

別るゝ時の 母の言

思へは残る 孝の道

更にも残る 忠の道

我は死すべき 時ならず

心に思ひ 氣を定め

がばと降り立つ 暗の庭

身を忍ばせて 垣の下

ついちの上と さすらへど

さすがに濠の 深くして

逃れ路まどふ 暇もなく

忽ちどよむ 捕手の兵

窮鼠危し 九死の地

はや是までと 覺悟して

都の方を 伏し拜み

先だつ罪を 母にわび

死地は何所と 見渡せば

傍に立てる 吳竹の

梢は濠の 彼方へと

靡くは神の 導くか

攀れば屈む 彼方の岸

仕合せよしと 喜びて

さて湊へと 急げども

道には熟れず 夜は暗し

さすらふ後に 追手の兵

再び逼る 窮谷の

木蔭草蔭 身を潜め

隠びくくして 行くほどに

山伏の僧 出で來たり

阿新丸を 笈に入れ

湊をさして 負ひゆくは

あはれ何者の 化身かと

問はでもしるき 父の魂

さて恙なく 都へと

歸りて侍く 母がもと

父の祀りを 春秋の

積り々々て 人と成り

式微振はぬ 南朝に

生の涯りを 仕へたる

日野中納言 邦光の

一元多情

幼な心の 尊としや

一三四



一元多情終

大正三年八月卅一日印刷

大正三年九月十日發行

一元多情奥付

定價金四拾錢

著作兼發行者 石井 要
東京市本郷區森川町一番地橋下四五〇

發行所 かたばみ書院
東京市本郷區森川町一番地橋下四五〇

印刷者 藤澤 外吉
東京市神田區表神保町二番地

印刷所 弘文堂
東京市神田區表神保町二番地



發賣所

東京市神田區表神保町一
番電話本局一三三九番
振替口座東京六七四七番
東京市神田區錦町一、二番
電話本局三七七一、七二六番
振替口座東京三四〇九番

國民教育社
二松堂

紫東著 知る人ぞ知る 全一冊 近刊

法の巡查と徳の飴屋とが力を協せて瀕死の幼児を樽より救ひし奇遇の事實を捕へ來りて結構し、酒洙の流れの滌々と歌ふ飴屋の聲より筆を起し、耕人屑々の狀、山村洋々の趣味、榮落滄桑の變、教育感化の力より、飴屋の明巢狙ひ、巡查の法の一と聲、兩人の家宅捜索、幼兒樽責の悲劇、母子の訊問、鬼母の拘引、二人り一と腹一團の喜劇と、説き去り説き來りて批評となり議論となり、時に人生觀となりて否塞通泰極りなきを歎き、女性觀となりて彼の心的存在を疑ひ、又社會觀道德觀となりて士道の衰廢を慨し、法教の乖離を説き、學校教育の形式を難じ、忽ち酒屋の息子となりて飴の功德を歌ひ、奎兵衛田五作となりて、日焼畑の茄子の木に感激の露を宿し、茲に初めて徳の力は法の力に勝ることを暗示す、著者自ら叙して曰く「晩近洋化雜駁の教義浸漸して人情轉た澆く、徳の制裁日に潰えて形式の煩瑣月に加はる、此の時此の際、些にても醇厚の俗を維持せんと努むるは國士の分だ」と、以て本書の内容を窺ふ可し、文は簡潔を主として冗長に渉らず、韻文あり小品あり、駢儷ありて概ね話語體をなす、讀む人は讀む可し。

終

